

ピンポンダッシュ

第1稿

井上ゆうき

2025/06/15

△登場人物▽

伊藤大吾(○) ……小学4年生の少年。

中村凜(○) ……大吾の友達。

○住宅街・とある家の前

一軒の戸建て。

家の前のインターホンに伸びていく手。

ボタンが連打され、インターホンの音が何回も鳴り響く。

玄関ドアが開き、中から女性（ホ）が顔を覗かせる。

家の前を見やる女性。

しかしそこには、誰もいない。

○同・路上

ランドセルを背負い、走っていく少年2人の後ろ姿。

大吾「これは、10年前に僕が経験した、ある出来事の話です」

タイトル「ピンポンダッシュ」

○同・公園

公園の水道で水を飲む大吾と凜。

大吾 「あの女の人の顔見た？」

凜 「見た見た。不思議そうに外見ってたよな。笑えるー」

大吾「当時小学4年生だった私はいたずらっ子で、よく友人と見知らぬ家のインターホンを連打して走り去る、いわゆるピンポンダッシュをよくしていました」

○同・路上

歩いている大吾と凜。

凜 「次、どこにする？」

大吾、ある家を指差す。

大吾 「あそこは？」

指した指の先には、広い庭のある2階建ての家。

大吾「私の家庭は貧乏だったので、その腹いせか、私が狙っていたのは、いつも裕福な人が住んでいそうな大きな家でした」

凜 「いいね」

大吾「その日も例に漏れず、大きな庭のついた家を狙いました」

○同・家の前

表札はボロボロになっており読めない。

大吾、家のインターホンを連打する。

家の中に、何回もインターホンが鳴り響く音が聞こえる。

大吾と凜、その場から走り出す。

○同・家の近くの物陰

大吾と凜、家から少し離れ、家の玄関が見える物陰に隠れ、玄関を見つめる。

しかし、家からは誰も出てこない。

凜 「留守か？」

大吾 「チッ。つまんな。もう一回押そ」

2人、家へ再度歩き出す。

と、突然勢いよく「ガチャ」と音がする。

大吾・凜「？」

大吾と凜、音の方を向くと、必死の形相をした老人が、走って2人へ向かってきている。

大吾と凜、あわてて振り向いて走り出す。

○同・路上

走っている大吾と凜。

大吾、後ろを振り向く。

老人が追いかけてきている。
その距離30メートルほど。

大吾 「なんなんだよあいつ……！」

凜 「どうする？」

大吾 「公園まで逃げよう。そしたら人目が気になって、あいつ追ってこれないだろ」

凜 「わかった」

○住宅街・公園

多くの子どもが遊んでいる。

大吾、凜、公園に到着する。

ジャングルジムの頂上に登り、緊張した顔で走ってきた方向をみる2人。

老人は来ていない。

大吾 「危なかったー」

凜 「怖いし、もう今日は帰ろうぜ」

大吾「またどこかで老人に遭遇すると面倒だったので、その日は解散することになりました」

○大吾のマンション・リビング・玄関前（夜）

大吾、ソファに寝転んでスマホゲームで遊んでいる。

テーブルの上には「冷蔵庫にある皿、温めて食べてねママ」と書かれた紙が置いてある。

スマホの通知音になる。

大吾、メッセージアプリを開くと、凜から「帰れた？」とメッセージが来ている。

「もち。また明日な」と返信する大吾。

と、家に突然インターホンが連続で鳴り響く。

大吾、インターホンの画面を見に行く。

画面には誰も映っていない。

大吾、凜に、「悪戯すんな」とメッセージを送る。

と、またインターホンが鳴り響く。

大吾、インターホンの画面を見て驚いた顔。

インターホンの前には誰も立っていないのに、家の中で何回もインターホンの音が鳴っている。

スマホの画面を見る。

凜から「悪戯？なんのこと？」との返信。

大吾、まっすぐ続く廊下の先にある、自分の家の玄関ドアをのぞく。

大吾、玄関の方へゆっくり歩いていく。

大吾、玄関ドアの前につく。

息を呑み、ドアスコープを静かにのぞく。

ドアの前には、誰も立っていない。

大吾、ドアを開ける。

マンションの渡り廊下を覗く。

人気のいない廊下。

大吾、ドアを閉め、安堵の息をする。

と、部屋の中でポチポチと音がする。

振り向くと、廊下の奥の暗がりでは、顔の见えない何者かがインターホンの前に立ち、ボタンを連打している。

固まる大吾。

暗がりの影が、連打していた指を止める。

息をのむ大吾。

その影の主（老人）が、ダッシュして大吾に向かってくる。

叫ぶ大吾。

大吾「これ以降、僕はピンポンダッシュをやめました。あの老人は、一体誰だったのでしょうか」

（終）